

2022 年度ミニ観察会 ー少人数でじっくり観察しようー

上野不忍池で都市の水鳥観察

主催：NPO 法人自然観察大学 担当講師：唐沢孝一、越川重治、司会・進行：石井秀夫

このミニ観察会は、ずいぶん前に企画されたのですがコロナ禍のために延期、ようやく実施されました。やや寒かったものの、幸いにも天気にも恵まれ水鳥の形態や生態をつぶさに観察することができました。対面での観察会、フィールドで実物に触れての観察会のよさを味わいました。ここでは、観察会で観察したことのエッセンスを報告します。

※ このレポートに掲載した写真は唐沢孝一、越川重治、石井秀夫。（禁無断転載）

●上野不忍池の歴史をさかのぼる

今から 4000～5000 年前、縄文時代の海面は高く、武蔵野台地の先端にある上野台と本郷台の間の谷間は海でした。その後、海退により海面が低くなり、平安時代に不忍池が取り残されました。江戸時代には、上野台を東叡山と称し寛永寺を建立。不忍池に弁天島がつくられました（京の鬼門・比叡山延暦寺に対応したものです）。弁天島は、琵琶湖の竹生島になぞらえています。明治になると、池の周囲 2 kmは競馬場になり、明治天皇はじめ伊藤博文、岩崎弥太郎、西郷従道などが競馬を楽しんだそうです。また、戦中戦後の食糧難時代には水田として耕され、現在は動物園、ボート池、ハス池などに分かれ、水鳥の越冬や繁殖地として都民に親しまれています。



上野台地にある松月堂からみた不忍池の弁天島。
約 10mの石段の高低差は縄文時代の地形の名残



●カワウのコロニーを観察

当たり前のようこのコロニー（集団営巣地）を見ていますが、大都市の真ん中にこのような大型の水鳥のコロニーがあるのは世界的にも非常に貴重です。

よく見るとカワウは、この厳冬期でも繁殖しています。魚食性のカワウは一年中繁殖

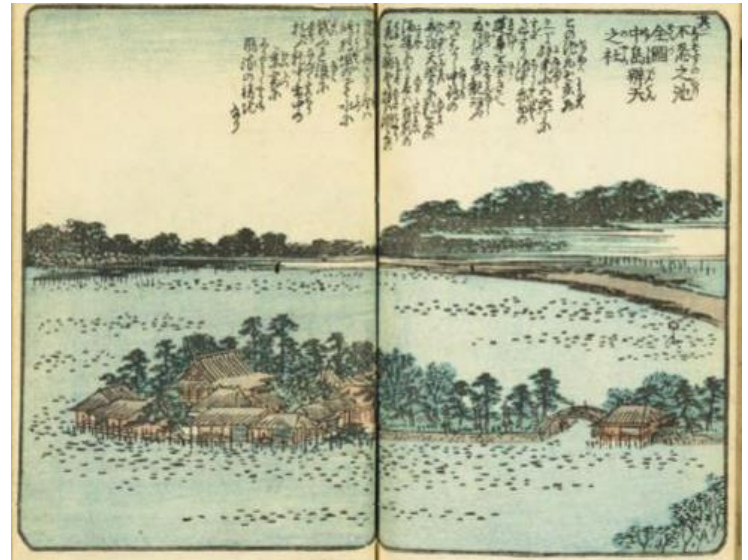
← カワウのコロニー。
繁殖している巣の周りは糞で真っ白

できるのです。不忍池では 1 月～6 月、8 月～12 月で繁殖が行われています。

繁殖している樹木を見ると真っ白になっています。これはカワウの糞で、かつては各地で肥料として使われていました。この糞で樹木はしだいに枯死してしまいます。不忍池の樹木も擬木を含めて何回か植え替えられています。樹木が枯死し枝が落ちてしまった 2009 年には地上での繁殖が見られました。

●不忍池のカモの優占種の変遷 を見てみよう

江戸時代後期に活躍した歌川広重の浮世絵『不忍之池全図 中嶋弁天之社』に「冬は鴨雁(おうがん) 蠅の如く水に戯ぶれ」とあり、カモやガンが多くいたことがわかります。上野動物園の水鳥が放飼され給餌が始まり、1954 年から野生のカモを馴らす目的で定期的な給餌がはじまりました。はじめに餌付いたのはコガモ、次にオシドリ(約 300 羽)が集まりました。その後 1970 年代には市民の餌やりが活発になり、オナガガモが急増(1975 年 3000 羽以上)。2008 年からの鳥インフルエンザの流行で給餌が自粛されると、オナガガモが分散・減少しました。以降はキンクロハジロが優占種となっています。



歌川広重の浮世絵
『不忍之池全図 中嶋弁天之社』



ボートが接近してきた時のキンクロハジロの反応。
カイツブリだったら潜水して逃げることでしょう

●岸辺のカモ類をじっくり観察

カモ類の多くは夜行性です。日中は安全な場所で休んだり、眠ったりしています。よくみると、眠っているようでいて起きています。起きているようでいて、実は眠っています。不忍池のどこで、どのように休み、危険や天敵に対してどのように警戒するかは、カモの種類によって異なります。潜水できるカモもいるし、できないカモもいます。観察会では、そのところをじっくりと観察しました。観察会の前日には、岸辺の高木にオオタカが、観察会当日にはノスリが出現。池のカモ類ものんびりできません。

●カモの雌雄とその性比を観察

ボート池の一角にはキンクロハジロが群がっています。雌雄の羽数を参加者全員でカウントしてみました。結果は「雄 48 羽、雌 13 羽」。圧倒的に雄が多いのです。なぜ雄が多いのか、いろんなことが考えられます。ヒントになるのは、ホシハジロやコガモの場合です。北で越冬している個体ほど雄が多いことが知られています。また、カモ類は雄の方が雌より優位なことが知られています。そのためペア(つがい)になると(雄に守られて)雌も優位性があがります。ホシハジロではペアになる時期が遅いため、越冬中雌はずっと劣位のままであり、良い餌場を確保できずに生存率が下がるのではないかと考えられています。不忍池のキンクロハジロの性比がこれだけ異なる理由は何なのか、知りたいところです。



池のキンクロハジロの雌雄の羽数を全員でカウント

●標識したユリカモメ、キンクロハジロを発見

水鳥を観察する時に注意したいのが足元です。足環(アルミ製)やカラーリングがついていることがあります。双眼鏡で見たり、写真に撮ったりして刻印された番号を読み取ると、捕獲された場所、雌雄、年齢などが分かります。下見で観察したユリカモメの足環番号は「8A07…」でした。調べてみるとなんと、29 年前に捕獲されたものであることがわかりました。観察会の時には、ユリカモメの背からアンテナが出ている個体を見つけました。背には発信機が取り付けられており、衛星中継され、移動先や越冬地、繁殖地などが追跡調査されています。



背にアンテナが見えるユリカモメ。カラーリングには「3/Z」

●オナガガモの死骸と 抜け落ちた羽を観察

鳥の羽の役割は、大きく二つの機能があります。
「保温」と「飛行」です。

池の岸辺に浮いている羽をネットですくい、綿羽、半綿羽、正羽などを手にとって観察しました。実際には、1 月 14 日の下見の際に採集し、消毒して乾燥した羽毛を全員に配布し、ルーペで細部の構造を観察しました。

セグロカモメの翼の羽毛（プロペラの役割をしている）を手にもち、その軽さ、しなやかさを実感してもらいました。また、下見のときに見つけたオナガガモ（雌）の死骸では、初列風切羽や半綿羽なども至近距離から観察できました。



池岸で見つけたオナガガモ(雌)の死骸を教材に、
鳥の羽毛を学習



観察会の終了時に
池の近くのビルの高所から
じっと下をみつめる猛禽
(ノスリ)

レポートまとめ：唐沢孝一、越川重治

参加いただいたみなさん、担当いただいた唐沢孝一先生、越川重治先生、石井秀夫さん、ありがとうございました。

最後に、参加いただいたみなさんからのアンケートから、その一部を紹介させていただきます。

- 名前を知るだけでなく、水かきとその動き・眼に注目・餌の採り方と脚の付き方・飛び立ち方の違いなど、水鳥について多面的に学ぶことができた。説明のための写真や図がわかりやすかった。(HG さん)
- 事前に周到に準備されていたことが伺われ熱意がメラメラと伝わってきて、聞く側もテンションが上がりました！ 鳥を捕まえてリングや発信器をつけることに批判的な印象を持っていましたが、その情報が、今後鳥たちのために使われる可能性を含む善意のようなものを感じ、考えを改めました。(KT さん)
- 不忍池の歴史から、水鳥の足の構造と生態の関係、興味深く聞きました。鳥の羽の構造のすごさには驚くばかりでした。(NT さん)